

子どもたちが自ら学びを生み出すための図工科授業のデザイン（Ⅱ）

研究代表者：寺川剛央（和歌山大学）

共同研究者：西原有香莉（和歌山大学教育学部附属小学校）、笠原 彩（和歌山市立楠見東小学校）、南出苗央（和歌山市立野崎西小学校）、村山優子（紀の川市立荒川小学校）

1. 研究の目的

前回の研究では、小学第3学年の児童を対象に液体粘土における題材開発をし、実践と検証を行った。感性的な関わり合いにより造形活動をしていく過程では、自分なりの表現をつくり出していた姿が見られた。その姿から、自身のつくり出した表現の価値を実感できていたことが推測される。この事実から、自分なりの表現の価値や意味の実感が「つくり出す」喜びを支えることや創造力を育むことに繋がっており、子ども自身が自己の造形活動を振り返り、自身で見つめることの重要性が明らかとなった。液体粘土という素材が、子どもたちに大きな刺激を与えたようであった。

しかし、図工科の授業デザインは、単に素材の「力」だけに頼る事には限界があることが課題としてあがり、図工科に独自の、また、それと同時に教科を超えて広がっていく、教えと学びの方法に関する課題が浮かび上がった。

図工教育の独自性や他教科・他領域に転移する力、さらに未来を切り拓いていく資質・能力との関連を考えた時、やはり重要になってくるのは「創造性」の育成だろう。

また、他教科・他領域と比べたとき芸術教育の特徴は「感性」を育てるところにある。「感性」は人間の精神が何かを認知する能力である。「感性」の認知としてはたらし方として、ふじえみつるは「感覚レベルで差を感じ取るというセンスのはたらし（センサー）から、それぞれの異なる事象や分離されたものの間に通底するベースを感じ取る直観力、さらに人間同士の共感力に至るまで多様な形態がある」⁽¹⁾と述べている。感覚レベルで差を感じ取ることは、感受性ともいうことができ、磨かれることで細かな差異を感じ取ることにもつながり、多様性を受け入れる力にもなると考えられる。また、他者と共有できる共通の感覚をもてることが「感性」としてはたらく時、二十一世紀型能力として重視されるコミュニケーション力にもつながりをみせるだろう。これ

らのことから、感性を育むことは他の力へと広がりをもせる可能性があると考えられる。

図画工作科の時間の中では、子どもたちのもつ豊かな身体感覚と素材や場、空間などの様々な「こと」や「もの」と出合いを果たし活動が展開されていく。子どもたちが周りを取り巻く環境に対して自ら発想し、工夫して活動を展開していく学びを実現するためには、絶えず、目の前にある造形物に価値や意味を見出していくことが鍵となる。さらに、そのような活動は、子どもたちがもつ豊かな身体感覚に支えられた感性を働かせることで展開が可能となる。本研究では、特にその過程にある感性的な対話に着目したい。感性的な対話とは、素材や場、空間といったあらゆる環境と子どもの柔軟な身体が出合い、展開されていく感性的な関わり合いともいえる。感性的な関わり合いは、自己内で行われ、言葉にならないレベルで展開されていることが多い。そういった感性的な自己内対話に支えられ、子どもたちは創造的に活動していくのである。この対話の充実が、子どもたちそれぞれの「表したいこと」を見つけること、つまり、自分なりの課題を見つけることにつながり、さらに、自ら学びを生み出す活動がより活発に行われ、それにより図画工作科の独自性や他教科・他領域とのつながりや相互作用が明らかになると考えた。

2. 題材の実践報告

本実践は、和歌山大学教育学部附属小学校5年生を対象に行った。

（1）子どもたちの感性に働きかける素材

本研究では、ワイヤーによる題材を試みた。ワイヤーは、子どもの働きかけがそのままの形で保持され、形の変更も容易であることから、扱いやすい素材である。そのような特性から、「線材からの立体構成」のような造形活動が行われてきたが、一方で、近年図画工作科で扱われることが少なくなってきたような印象がある。その

理由の一つは、立体としての表現をすることが比較的難しいということが考えられる。しかし、立体素材としての扱いにくさは、一方では「線材から立体を表現する」ことの本质にかかわる難しさであり、その難しさは学ぶべき価値でもあり、魅力的な部分でもある。

本題材では、アルミ線を用い、自在に姿を変える柔らかな線と張力をもって張った時にみせる緊張感のある直線の2つの特性（素材の魅力）を子どもたちに示す。そして、素材体験を積み重ねていく中で、針金にかかわる造形の技法を発見すると共に、多様に変化する針金を目の当たりにすることから、表現の可能性を探り始めると考えた。

（2）創造へ意欲を高めるテーマ設定

造形のテーマを「ワイヤーの森」とし、それぞれが思いついた植物を教室に造形する。ワイヤーの森というテーマ設定は、それまで獲得してきた素材体験における学びの活用を促し、針金の特性を活かした有機的な柔らかな表現を導き出すと考えた。更に、植物として意味づけられることで、アルミ線のつくり出す曲線のよさや光りの美しさを改めて味わうことにもなる。素材に関する新たな気づきが、イメージを膨らませ、“表したいこと”への思いを更に深めていくことを予想した。そして、自分や他者の働きかけにより教室の風景が変わっていくことから、場や空間を変化させることのおもしろさを感じることや自らが創造者であることの自覚につながり、創造への意欲が高まることから、探究的な学びが実現できると考えた。

（3）感性を育むカリキュラム

教科内では、1学期に、造形遊びを中心とした表現活動の時間を多く設けた。本研究の対象児は5年生であることから、形や色がもたらすイメージを学ぶ混色や色が感覚へもたらす効果を学ぶことを目的とした活動を意識した。例えば、絵の具で色づくりをする活動である。その際、色のもつイメージを感性と知性の両面から認識することをねらい、つくり出した色を名付け、自身のもつ色のイメージを言語化することも活動に取り入れた。また、形の感覚に対するアプローチとして、身の回りにあるもの（はさみや鉛筆、コンパス、家から持ってきた

フィギュアや洗濯ばさみなど）をアルミホイルで包んだ“かたち”を組み合わせることで抽象的な形をつくるという活動も行った。さらに、出来上がった作品を、多方面から自身で鑑賞したり、他者の作品を見合ったりした。これらのように「形や色」を造形的な視点で捉え自分なりの意味や価値を見出すことを目指した表現活動を行うことで、感性的な対話の充実をねらった。

題材内では、造形遊びによる素材体験から立体造形へと発展的な題材構成をした。造形遊びによる素材体験の充実の中で体験的に素材の特質を学んでいくことで、後半の立体的な造形活動において、自分なりの表現のより深い探究を支えると考えたからである。また、自分と違った表現があることやそのよさを味わうこと、そしてその気づきが自身の表現の広がりへ還元していくことをねらい、互いの表現を見合う場を意図的に設定した。その際、図工カードに表現のよさを言葉で記録していくことにした。感じていることを言語化することで、感性と知性の両面から、表現の価値や意味の実感を促すことにつながることを考えたからである。

（4）題材の概要

「ワイヤーの森～未来から種がとんできた！？～」

第一次に造形遊び的に素材体験と基本の技の習得をねらった時間を設定した。基本の技として、5つの表現方法を提示した（図1）。

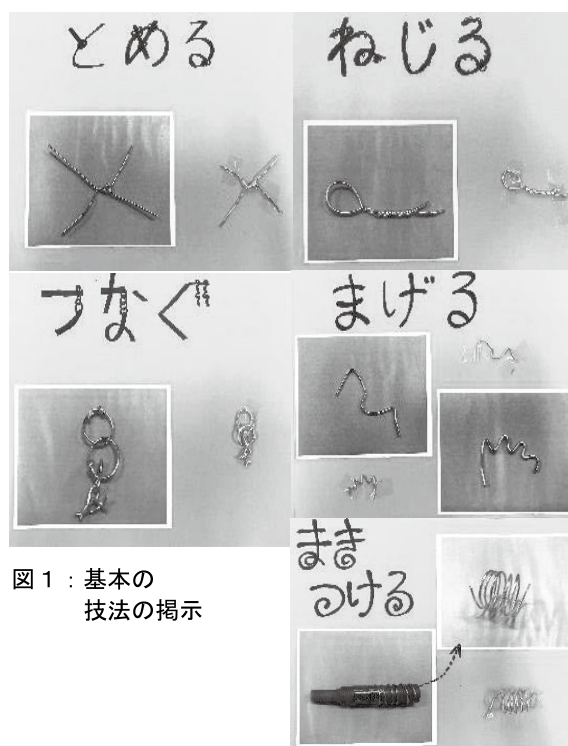


図1：基本の技法の揭示

活動する中で、提示した技法を組み合わせたり発展させたりしながら、新たな表現方法を生み出そうとする姿が見られた。

第二次は、第一次で獲得した知識・技能の活用・発揮をねらった立体による表現活動の時間を設定した。ここで、本題材のテーマになっているワイヤーで植物の造形を行った。造形の場合は、図工室である。子どもたちは、これまでに獲得してきた技法や自分なりに生み出した表現をうまく使いながら、植物の造形をしていた。また、図工室の天井が金網になっていることから上から植物をつり下げたり、ワイヤーを張り巡らせることで造形の場を広げて、図工室が変化していくことを楽しんだりしている子どもたちの姿が見られた。植物のかたちも多様に見られ、自分なりのつくりたい植物のイメージを広げ、その実現にむかって追究していた。

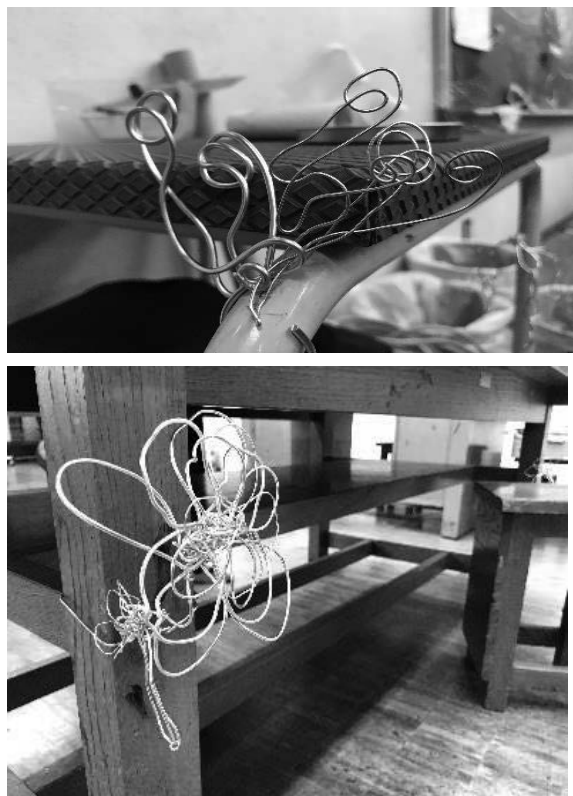


図2：第二次で制作された作品

3. 研究の成果と課題

本研究の最も大きな成果は、一人として活動がとまっている子どもが見られなかったことである。それは、個々にある植物のイメージを実現できるための知識・技能が、それまでにある程度培われていたことや、異なる感性をもつ友達の表現活動が常に見える場であったこ

との効果であったと感じている。また、つくり出していた表現はそれぞれに個性的で、似た作品がなかった。それは、共通でありながら表現の自由度が高いテーマの設定や言語化が、自分では気づかなかった表現の価値や意味の実感を感性と知性の両面から促した成果であると感じている。このような事実から、感性的な対話の充実や必要に応じた言語化が、子どもたちの美術教育における学びを深めることに効果があったと感じている。図画工作科の学びの可能性や価値は明らかになりつつあるが、その学びの他教科・多領域への広がりに関しては、まだまだ検証する必要がある。

未来の社会は、A Iの技術がさらに生活の中に活用されていくだろう。そのような社会の中で、感性や創造性はますます重要な資質・能力となってくる。図画工作科の独自性を明らかにするだけでなく、他教科・多領域とのつながりや相互作用について、研究と検証が必要である。

引用文献

- (1) 神林恒道 ふじえみつる 監修 (2018)「美術教育ハンドブック」 三元社